

町史シリーズ③ 上総介平良兼の伝説 その史的風土

古代末期、律令体制に抵抗して東国各地に叛乱が起ったが、中でも平将門の乱(九三五―九四〇)は京都貴族に重大な警告をあたえた。将門は桓武天皇の曾孫高望王の孫にあたり、下総国豊田郡に根拠をかまえ、毛野・利根両水系の乱流する関東平野の荒涼たる農村を背景に、英雄的な活躍をした。

比定する学説が一般的であった。古代史シリーズの最終回にあたって、町史編纂室では『良兼伝説』をとりあげ、その歴史性と虚構性へのアプローチを試みた。

良兼伝説

将門の叔父にあたる上総介平良兼は、国司として上総国一円に勢力をもっていたが、承平六年(九三五)両総の兵をひきいて、下野の国境で将門軍と戦った(『将門記』)といわれる。

従来の古代史研究の成果によれば、邯鄲良弼・清宮秀堅など平良兼(上総介)の根拠地として上総国武射郡屋形村(横芝町屋形)を

宮を鎮守とし、寺院を来照院と称したといわれる。また、良兼にまつわる伝説としては、屋形部落に千年も続いているといわれる「獅子舞」があげられる。この獅子舞は、早魃で東国の人民が困窮したのを見かねた良兼が、都へ年貢の削減と救済を訴えた時、帝は物資・薬草のほかに神霊三体を授け、民生の安全を祈願したと伝えられる(獅子舞の縁起書)。

一方、良兼館跡の明確な位置は知られていないが、良兼の墓所と伝承される古墳が部落北方の地にあったが、昭和初期に至って破壊されたといわれる。以上が屋形部落に伝えられる「良兼伝説」の概要である。

居館地をめぐって

この平良兼の伝説は、海音寺潮五郎氏の連載小説『平将門』で全国的に有名になったが、すでに清宮秀堅等によって「屋形、蓋上総介平良兼所館。亦據郡司故資也。天慶亂、良兼取問道、自武射小路至神前津。舟入常陸、與国香會。」との研究成果が発表され、また邯鄲良弼もその著書『日本地理志料』第十八巻の中で清宮説を紹介している。

海音寺氏は『将門記』の分析や『地名辞典』(吉田東伍)を検討された結果、その居館地について

「上堺村というのはごく近世に改称されたと聞いていますが、上堺の地は昔は蓮村に含まれていたのではないでしょうか。屋形部落はその境界に近い地点にありますね。小生が考えているのは、境目の近くにある「屋形」です」(地元研究者K氏への手紙)と谷津川付近の沼沢地に比定地を求めている。一方、将門研究家の赤城宗徳氏は、良兼はその性格から平坦地に居館をおくはずがなく、屋形部落では湿地帯なので多数の従類を居住させるに適當な耕地が得られないとして、横芝の北方台地(例えば坂田城跡など)に比定地を求めている(『将門地誌』毎日新聞社・昭47)。

また近年の城郭研究ブームの影響もあってか、屋形方面に「良兼館跡」探索に訪ずれる研究者もあり、最近では連沼五所神社付近の微高地も有力な比定地にあげられつつある。けれども大類伸編『日本城郭全集』No.3に報告の通り、良兼館跡の位置については全く不明であることに注意されたい。

伝承の再検討を

以上、平良兼の居館伝説をめぐる諸説について概観してきたが、根本史料「将門記」(承徳三年真福寺写本)には「不就所々関自上総国武射郡之少道、到着於下総国香取郡之神前。」のみの記述しか

<横芝町史>予約募集中!

- 体裁 A5判・本文1000頁・ケース付
- 頒価 予価・2500円 (但、町民に限り1冊1500円)
- 注文方法 役場企画課町史係まで

なく、これを以て栗山川・神崎・利根川・水守と良兼軍の順路を想定し、ましてや「屋形居館説」を断定することはできない。そして何よりも、上総国府(市原市惣社)が考古学的に確認されている現在、良兼の居館地は市原方面であったとみるべきで、郷土の「良兼伝説」の取扱いは慎重に致すべきであろう。

ここで問題としたいのは、上総介良兼居館説の真偽ではなく、こうした「伝承」を生みだしてきた郷土の「史的風土」についての科学的検討である。「郷土史」の虚構性を科学的に検討し、その内なる歴史性を追究することである。これは「横芝町史」編纂の基本的なテーマでもあり、真に町民のための「地方史」構築への具体的な作業であると確信している。(文責・町史編纂室)

